

学生記者の

# 多摩ぶらり散歩

3

## 多摩センター

中央大学の周辺には、さまざまな史跡をはじめ、豊かな自然やお楽しみスポットが数多くある。でも、意外と気づいていなかったり、知っていてもなかなか行くチャンスがなくて、いつも素通りという人が多いのではないだろうか。そこで学生記者がお薦めスポットを紹介する。題して『学生記者の多摩ぶらり散歩』。はたして、何やら新発見がありますでしょうか。

### 冬、中大学生に馴染みの街が輝く イルミネーション見に大勢の人

京王、小田急、多摩都市モノレールの3本の鉄道路線が通る街、多摩センター。ショッピングをするもよし、映画を観るもよし。この街には大抵のものは揃っている。中大学生にとっても遊び場として馴染みのある場所だ。

メインストリートはパルテノン通り。いつもは和やかなイメージのある歩行者専用通路である。そんな通りが、師走が近づくと華やいだ場所になる。

8回目を迎えた「多摩センターイルミネーション2008」(2008年11月8日〜2009年1月7日開催)は、都内最大級の「ストリートイルミネーション」との呼び声もあり、ドラマのロケ地として使われるなどメディアから取り上げら

れることもしばしばある。

昨年12月23日。クリスマス直前のこの日、記者は寒空の下、イルミネーションを見に、多摩センターを訪れた。駅を降りた瞬間、人の多さに驚く。祝日ということもあり家族連れ、カップルで溢れかえっている。まだ午後6時手前というのに真っ暗だ。イルミネーションを見る環境はこれで整った。

### パルテノン通りが光でデコレーション 「光の水族館」に子供たちの歓声

幅40m、長さ300mのパルテノン通り、イルミネーションの始まりはクリスマスツリーである。ストリートミュージシャンの歌とマッチして、シンプルながらもやっぱりこれを見なくてはクリスマスが始まらないと実感。その先に続く、デコレーションされているイルミネーションに胸を弾ませ



サンタの森

次に現れたのは、昨年好評だったため、今年から距離を伸ばしたというトンネル状の「光の水族館」だ。アーチ状のイルミネーションにイカやタコ、ホタテなどの魚介類やイルカが散りばめられている。

今までに見たことのない光景だ。思わずカメラを構え、写真を撮ることに集中してしまふ。すると、「光の水族館」を通る子供たちが嬉しそうに、「サカナあ!」と叫んでいるのが聞こえた。その言葉につられて上を見上げた大人も子供みたいな顔で

嬉しそうに、「サカナ」を見つめている。記者もそれにつられ、上を見上げながらゆっくりと進んで行く。

気がつけば、両側のクスノキに電球が灯っている。その数58本。今年からは全ての電球を白熱球からLEDに取り替えたことで電力消費の減少を実現。エコなうえに、樹木への負担も軽くなったという。

その下には「サンタの森」と名づけられたイル



高さ15メートルのもみの木（中央）

ミネーション。「サンタが何人いるかな？」と簡単なクイズもある。来場者に家族連れが多いからだろうか、子供たちへの配慮も忘れない。

また、よく見てみると光で包まれた鹿の首が、まるで草を食べているかのように動いている。動くイルミネーションもなかなか見ることがない珍しいものだ。

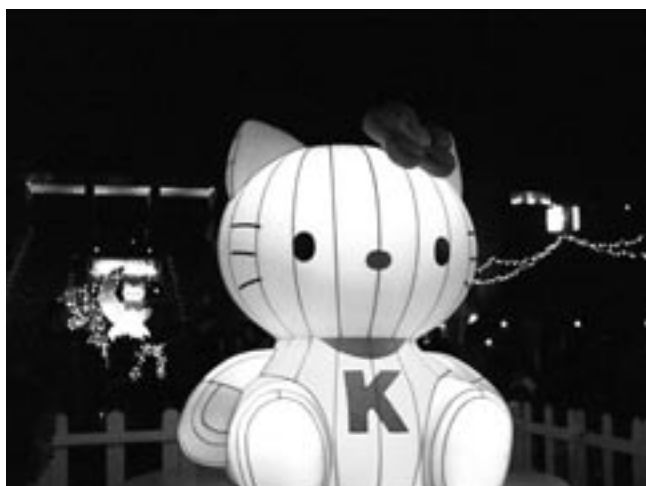
### 天をつく高さ15メートルのもみの木 次回は大切な人と見に来たい

東西通りとの交差部分には、高さ約15mのもみの木が行き交う人を圧倒するように天をつく。シンボルともいえるこのもみの木は、多摩市の友好都市である長野県富士見町の有志から寄贈されたものだ。はるばる150kmもの長旅をしてここに立っているのかと思うと、見る目が少し変わる。

その下の特設ステージではイベントが開催されている。記者が訪れたときには、コンサートが開かれていて、イルミネーションにより一層の華を添えていた。開会式や、サンリオピューロランドのキティたちによる点灯式、ゴスペルなどの合唱も全てこの特設ステージで行われる。

空気が澄んでいるからだろうか。歌声が響いているからだろうか。それとも大切な人と見るからだろうか。暗闇に光るイルミネーションが実にキレイに見えるから不思議だ。ちなみに記者はこの日、一人で行く勇気がなく、友人を誘った。

さて、パルテノン通りの最後に待っているのは



おなじみのキティちゃん

おなじみキティちゃんだ。多摩センターらしさが溢れているサンリオキャラクターたちのイルミネーションのまわりには、女の子たちが集まっている。35周年になるという月にまたがったキティちゃんはインパクト大だ。

一帯に散りばめられた光たちは、ひとつだけだと目立つことはないのに、集まり形づくられるととてもキレイな姿に変身する。また来年のこの季節に、今度こそ大切な人を連れてイルミネーションを見に来たいと思った年の瀬であった。

（学生記者 新部真子 文学部4年）